

研究ノート

“小さなモノ探し”の行動論的分析 — “モノ探し行動”についての小考(2) —

佐々木 土師二

An approach to the behavior of “looking-for-something” (Part 2):
A behavioral analysis of searching for “low-involved” objects

Toshiji SASAKI

Abstract

This paper discusses some aspects of searching for psychologically low-involved objects. The three-dimensional “pyramid-type” model of behaviors pertaining to “looking-for-something” proposed by the present writer was applied to searching for low-involved objects. Subsequently, the decision making process involved in this search behavior was described, and the four types of the decision processes identified were compared.

Keywords: low-involved object, looking-for-something, pyramid-type model, decision making process of search behavior

抄 録

“小さなモノ探し”の若干の心理学的側面について考察された。まず、佐々木(2018)が提案した“モノ探し行動”に関するSTピラミッド型モデルの適用可能性が検討された。“小さなモノ”は重要度・関与度が低い“小物”を指しているが、その探し方では探索コストを低くするために「探索区域を狭くする」「探索時間を短くする」という動機が強いと考えられるので、STピラミッド型の上部の“小さな4角錐”で描くことができる。次いで、“モノ探し行動”の意思決定過程が9段階で描かれ、その4タイプ(慎重型、簡略型、試行錯誤型、衝動型)の比較分析が行われたが、試行錯誤型の独自性についての疑問が残された。

キーワード: 小さなモノ探し、低関与、STピラミッド型モデル、探し方の意思決定過程、モノ探しの4タイプ

はじめに: “小さなモノ探し”の意味

“小さなモノ探し”という表現は、内閣府政府広報室による2016年実施の『遺失物に関する世論調査』を引用した前稿(佐々木, 2018)において「傘、衣類、ハンカチなど、安価で大量に流通している物を落とした場合」と「運転免許証、財布など、値段が安くて大量に流通している以外の物を落とした場合」(筆者注: 下線部の「以外の物」は「物以外」とするほ

うが分かり易い。)を対比的に質問しているものを、前者を“小さな落し物”、後者を“大きな落し物”と略記したのを踏襲している。つまり、“小さなモノ探し”とは、形状や容量が小さい“小型の物を探す”ことをそのまま言うのではなく、“安価で大量に流通している物”で持ち主にとって重要度や関与度が低いモノを探すこと、いわゆる“小物(こもの)”を探すことを意味している。

(注)“小物”には「小さい物」という字義通りの意味や「こまごました道具」「細かいもの」(『角川国語辞典』による。)をいうことがあるが、「つまらないもの」(『精選版 日本国語大辞典』)を意味することも多い。

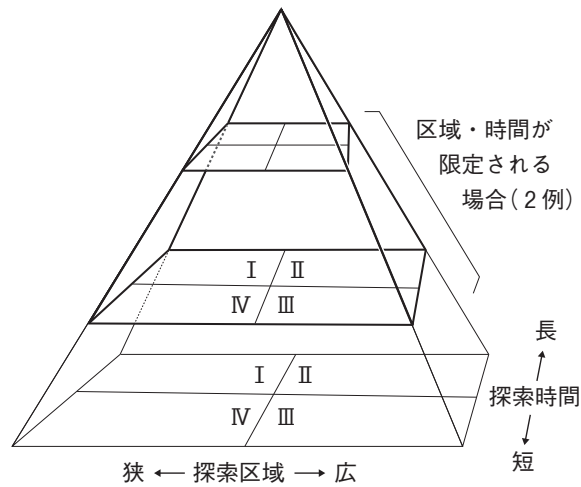
つまり、本稿では「小型」と「小物」には別の意味合いがあるとしている。そこで、「小型で小物」というモノがあるほかに、「小型であるが、小物でない」モノや「小物であるが、小型でない」モノもある。前者には、たとえば、宝石・アクセサリー、証明書・免許証、家や部屋のキー、携帯電話、腕時計、大事な記念品類(高級文具、バッジ・徽章、等々)などが相当する場合があるだろうが、これらのモノは、本稿での“小さなモノ”には該当しない。

本稿では、まず“小さなモノ探し”をSTピラミッド型モデルに関連づけ、その行動をこのモデルでどのように表すかを検討したい。そのうえで、“探し方”に関する意思決定過程を段階状でモデル化し、その段階構成にもとづいて“探し方”を4タイプに分類する試みを述べ、問題点を考察したい。

I. “小さなモノ探し”へのSTピラミッド型モデルの適用：モデル展開の具体的試み

(1) 問題

佐々木(2018)は、“モノ探し行動”における「探索区間(Space)が“広い～狭い”」と「探索時間(Time)が“長い～短い”」との組合せから成る“ST2次元空間”が、そのモノ探しの進行に応じて図Aに示すように連続的に縮小していくという仮定で成り立つ4角錐で描かれる図式を“STピラミッド型モデル”として提案した。しかし、そのモデルは「探索区間」「探索時間」「進行度」の3次元だけで描いた基本形であり、きわめて単純で抽象的であることを自覚して、たとえば、上述の内閣府政府広報室の『遺失物に関する世論調査』における遺失物の2タイプを略称した“小さな落し物”と“大きな落し物”との違いについては「なんらかの補足的説明か副次モデルを必要とすることになる」と述べていた(p.86)。



図A “モノ探し行動”に関するSTピラミッド型モデル

そこで、本稿では、まず、“小さなモノ探し”をSTピラミッド型モデルでいかに表現するかを示し、その特徴と限界を考えてみたい。

(2) STピラミッド型モデルでの“小さなモノ探し行動”の位置づけ

本稿での“小さなモノ”は持ち主にとって重要度や関与度が低いモノを意味している。つまり“ベネフィットが小さいモノ”“価値が低いモノ”であるので、その探索には「あまりコストをかけたくない」という動機が働くはずである。現に上記の内閣府調査では、落し物への対応の仕方なかで「特に探さないであきらめる」という回答をした人は、“大きな落し物”では1.1%であるのに、“小さな落し物”では49.6%にもなる。

「コストをかけない」ということは、探索の範囲や規模が小さくなることに通じる。これをSTピラミッド型モデルで表せば、「探索区域を狭くする」と「探索時間を短くする」ということである。それは、このモデルでは、4角錐の上部の位置で構成される相対的に小さなサイズのST2次元空間になる。この空間は図Aに示した同モデルの基本形のなかでの「区域・時間が限定される場合」にあたり、その後の探索行動の推移も、図Aで太線で示すように、相対的に上部の小サイズの4角錐で表されることになる。もともと“モノ探し”の進行に応じて「探索区域が狭いx探索時間が短い」という側面が拡大していくと考えられるが、“小さなモノ”の探索プロセスでも、この側面に当る象限IVが強調されるのが一般的だろう。

(3) 自宅・職場などの室内での“モノ探し”

STピラミッド型モデルでの「区域・時間が限定される場合」は、自宅の居室や職場の事務室などのなかで“モノ探し”をする場合にも当てはまる。このような状況では、少なくとも「探索区域」はほぼ特定化されているが、その内部の小さな範囲での行為になるために大きな移動や問合せの時間は限定されるので、それが「探索時間の長さ」の短縮につながるはずで、ST 2次元空間のサイズは小さくなる。したがって“小さなモノ探し”と同様に、図Aに示した同モデルの基本形のなかで太線で描いた部分に相当することになる。自宅や職場での“モノ探し”の対象物は多くのケースが“小型”だと思われるが、そこで占める“小物”の割合は相当大きいと推測され、本稿の視野に入れる話題の一つと考えられる。

自宅や職場でのモノの紛失は、“置き忘れ”による場合が多いと思われる。つまり、そのモノの無造作な取扱いが主たる原因であろう。それだけに紛失状況を想起することが難しく、また対象物が“小物”であるほど、その“モノ探し”では「中止」や「延期」の可能性が増えることが予想される。

(4) STピラミッド型モデルの形状に影響する要因

こうして、STピラミッド型モデルの形状は、“小さなモノ探し”では開始時点において相対的に（基本形と比較して）探索区域が狭くて探索時間が短い状態であり、また“自宅や職場での部屋内でのモノ探し”でも同様の状態で開始されることが想定される。そのため、これらの状況でのSTピラミッド型モデルは、基本形の上部だけで描かれるとしていた。

このように、探索対象物（モノ）の性質や特徴により、また探索状況の違いにより、STピラミッド型モデルの形状に差異が生じることが想定できる。そうした差異をもたらす要因は、次のように例示できよう：

- i. 探索対象物（モノ）の性質・特徴……①物理的・空間的特徴、②探し手にとっての希少性・入手困難度、③探し手にとっての重要性・関与度（意味的価値）、④探し手にとっての芸術的価値、など。
- ii. 探索状況の性質・特徴……①探索の必要度・緊急性、②必要とされる丁寧度・緻密度、③探索に伴うリスク・困難度、など。

これらの要因に加えて、探し手の特性も影響するだろう。それには次の要因をあげることができよう。

- a. 探し手の個人的特性……①性格、②知的レベル、③身体的条件、④社会・経済的条件、など。
- b. 探し手の生活・行動環境……①一般的行動範囲、②情報利用度、③移動・交通条件、④居住条件、④時間的自由度（多忙度）、など。

(5) “小さなモノ探し”の特徴

“小さなモノ探し”の特徴は、基本形に示したものと異なることが考えられる。前稿（佐々木, 2018）では、ST 2次元空間の4象限の性質とその“モノ探し行動”の特徴を次のように示していた：

	探索区域の広さ	探索時間の長さ	“モノ探し行動”の特徴
I	狭い	長い	「丹念な探し方」
II	広い	長い	「当てのない探し方」
III	広い	短い	「おおまかな探し方」
IV	狭い	短い	「的を絞った探し方」

（ただし、象限IVは「やる気のない探し方」にも該当するとしていた。）

しかし“小さなモノ探し”では重要度や関与度が低い“小物”が対象物であるので、概して“探索意欲”が弱いということが想定される。そういう場合の“探し方”は、たとえば、次のような特徴として表現することもできるだろう。

- I（狭い x 長い）「散漫な探し方」
- II（広い x 長い）「ポーズとしての探し方」
- III（広い x 短い）「お座なりの探し方」
- IV（狭い x 短い）「やる気のない探し方」

こうした特徴づけは、“探しモノ”の違いも関連して、いわば任意に行うことができるので、単なるフレーズの使い方に過ぎないと言えるかも知れない。

(6) STピラミッド型モデルの上での“小さなモノ探し”と“大きなモノ探し”

これまで見てきた“小さなモノ探し”はSTピラミッド型モデルでは、図A（太線部分）で示したように、その基本形の上部だけが当てはまるとしているが、“大きなモノ、つまり、重要度・関与度が高いモノ”を探す行動では、そのモデルの基本形が起点になると考えられる。その行動はST 2次元空間における「探索区域が広い」「探索時間が長い」という性質（象限IIが表す。）をベースとして、強い“探索意欲”に支えられ、探索の進行に応

じて「探索区域が狭い」「探索時間が短い」という方向に変化していくところから、STピラミッド型モデルは象限Ⅳ（狭×短）が他の3象限よりも広がる“歪み”を伴った図式として表される。ただ、その図式でも、4角錐の上部になるほどST 2次元空間のサイズが小さくなる「シンプルなピラミッド型」になるとは限らない。つまり、重要度・関与度が高いモノを探すとき、発見されるまで、そのサイズの拡大と縮小を繰り返すプロセスを辿ることが想定される。この場合には、前稿（佐々木, 2018）で述べた「天守閣型」になり、「凹凸のある4角錐」として描かれることになる。また、その“モノ探し”が中止される場合には、この「凹凸のある4角錐」が途中で横に切断されるような「天守台型」になり、下部に凹凸を含んだ台地が頂上になる図式として描かれる。（佐々木, 2018）

したがって、このようなSTピラミッド型モデルの変化の途上の形状が“小さなモノ探し”の起点を表すことになる。

このことは、STピラミッド型モデルの上部の形状だけでは、それが“小さなモノ探し”の起点を示すのか、“大きなモノ探し”の進行途上を示すのか、識別するのが困難であることを意味している。それは、この“モノ探し”の二つの典型の違いは、探索対象物（モノ）に対する探し手の“関与度（重要性認識）”という心理的側面にあるため、“行為”そのものを表したSTピラミッド型モデルでは表現されていないからである。

このモデルと心理的側面との関連については、前稿（佐々木, 2018）で触れたように、重要な検討課題である。

Ⅱ “モノ探し”の一般的枠組みとの関連で見る“小さなモノ探し”

(1) “モノ探し”の区域的方法と継時的的方法

“モノ探し行動”の基本的方法は次の2タイプであるという考えを、前稿（佐々木, 2018）で述べている：

- ① 区域的方法……紛失した可能性の高い場所・経路などを想起し、その区域を集中的に探す。
- ② 継時的的方法……紛失した可能性の高い状況を時間的順序に従って想起し、その順序で追跡する。

“小さなモノ探し”では「探索コストを下げたい」という意図が働くため、「探索区域を狭くする」「探索時間を短くする」という方向の行為が採られ、その場合の探し方では、区域的方法が採られやすく、継時的的方法は採られにくいと推測される。つまり“小さなモノ

探し”では、特定区域を“探しまわる”という行為が採られる可能性が高いと思われるのである。

このことは、ST 2次元空間の象限Ⅳ（性質は「探索区域が狭い x 探索時間が短い、略して“狭い x 短い”）」では「区域的方法を採用しやすく、継時的方法を採用しにくい」という一般化につながるだろう。この発想で、各象限での探し方の方法を推測すると、次のようになる：

象限（探索区域 x 時間の性質）	区域的方法の採用	継時的方法の採用
I (狭い x 長い)	しやすい	しやすい
II (広い x 長い)	しにくい*	しやすい
III (広い x 短い)	しにくい*	しにくい
IV (狭い x 短い)	しやすい	しにくい

* 「しにくい」けれども「しなければならない」という面もある。

ところで、一般的に、探索プロセスの進行とともにST 2次元空間のなかで象限Ⅳが拡大することが想定されていた（佐々木，2018）。“小さなモノ探し”では、前記のように、もともと象限Ⅳが広い状態から出発するが、その進行とともに、ますます象限Ⅳが拡大していき「区域的方法が採用され、継時的方法は採用されない」という傾向が強くなるということが推測される。こうした“推測”は、他の3象限での推測とともに、仮説として設定できると考えられ、“モノ探し”の具体的行動の分析における今後の実証的課題になる。

(2) “探し方”の決め方、その1：意思決定の2タイプ

“小さなモノ探し”では、多くの場合、その“探し方”について種々考慮し、慎重に選択することは少ないだろう。モノを落としたことや忘れたことに気づいた時、すぐに“モノ探し行動”に入るのが普通である。ただし、そうした、いわば“衝動的な探し方”がいろいろな“モノ探し”を行うなかで一般的であるとは言えず、時には、“探し方”それ自体についていろいろと考え、計画し、作戦を立てることもありうる。つまり、“探し方の選択についての意思決定”が行われる場合もある。

こう考えると、上記の“衝動的な探し方”を“探し方の選択・決定の一般的な形”のなかで位置づけることも、“小さなモノ探し”の特徴をとらえることになる。

そこで“探し方の選択・決定の一般的な形”を把握することが必要になるが、そのためには、筆者がかつて親しんできた“消費者・購買者”や“旅行者”の選択意思決定過程のモデルを参考にすることができる。その過程を描く「プロセス・モデル」は、おおむね、それで表現される心理現象や行動現象に次のような構造的特徴があると見ている：

- (1) いくつかの心理的・行動的な位相（段階）から成り立ち、各位相の主たる機能は他位相とは異なっている。
- (2) それらの複数の位相には機能的な連関があり、通常、その連関は時間的推移のなかで連続的・動態的にとらえられる。
- (3) それらの位相は相互に影響し合い、機能的な因果関係にあると考えられる。

こうしたプロセス・モデルは、1960～70年代には消費者・購買者の商品・ブランド・店舗などを主な選択対象として、その意思決定過程、情報処理過程、採用過程、コミュニケーション過程、広告効果過程など幅広いテーマに関して数多く提起され（杉本, 2012）、1990年代には旅行者の目的地（訪問先）の選択に関してもいろいろと提案されてきている（佐々木, 2000；佐々木, 2011）。これらのプロセス・モデルは、当然、本稿での記述の参考にすることができるが、ただ、それらは、商品・ブランド・店舗や旅行目的地などの対象物（いわゆる“モノ”）の選択プロセスを論じるもので、“探し方”のような「行為それ自体」（つまり“アクション”）の選び方を問題にしているものではない。

そのため、そのままの引用や一部改変によって「“探し方”の選択意思決定過程」を考えるよりも、それらのプロセス・モデルの特徴をふまえて、新たに提示するほうが生産的である。その目的で、あらためて“プロセス・モデルの構造”を見るために、消費者意思決定過程の代表的モデルであるエンゲル系モデル（エンゲル, J.F.が1968～2006年に共同研究者とともに幾度も改訂を重ねながら提起している一連のモデル。）を、杉本（2012, p.50ff.）の集約にならって示すと、①問題認識 → ②情報評価 → ③選択肢評価 → ④購買 → ⑤購買後評価 という5段階の位相から成り立っている。

こうした“流れ”を参考に“探し方”に関するプロセス・モデルを描こうとするが、その際、最初に、もっとも慎重に取り組む場合の“モノ探しのプロセス”をベースにしたい。それは、次のような段階構成として描くことができよう：

- (1) [問題認識] “モノ探し”が必要な事態が発生したことを認識する。
- (2) [一般的決定] “モノ探し”をするか、しないかを定める。
- (3) [選択肢（探し方）の探索] どんな“探し方”があるかを考え、既知の“方法”を思い浮かべたり、“探し方”についての情報を外部に求める。
- (4) [選択肢（探し方）の評価] “選択肢の探索”の結果から、成果（探し当てること）に辿りつくのに有望な方法と有望でない方法を識別する。
- (5) [試行] もっとも有望だと思われる“方法”で探しはじめる。
- (6) [試行結果の評価] その“試行方法”での成否の見込みをつける。

(7) [実行] 成否の見込みにより、成果が得られると思えば、それを継続し、成果が得られないと思えば、その“方法”を変更・修正したり、中断してまったく別の“方法”を採用する。

(8) [終了（達成または中止）] 最終的な成果（探し当てること）に到達すれば当然そこで終了し、到達しなくても、その“モノ探し”自体を中止することがある。

これは「慎重な意思決定」をフル・スケールで描いたもので、“慎重型”と略称することができる。しかし、一般的な“モノ探し”でこうした(1)～(8)の各段階を順に経験することは、ごく稀であり、「簡略な意思決定」が採られるほうが多いだろう。つまり、これらの8段階のなかの(3) 選択肢の探索、(4) 選択肢の評価の2段階が省略され、その“モノ探し”では、探し手が知識としてすでに蓄えている“探し方（選択肢）”がそのまま利用される。“簡略型”と呼ぶことができる。

(3) “探し方”の決め方、その2：試行錯誤型と衝動型

こうした意思決定型の2タイプは基本的なものであるが、一般に“モノ探し”では、それを延期することができない場合が多く、そのため、その時の状況的・個人的な事情に影響されやすいと思われる。とくに“小さなモノ探し”では、次のような特徴があるため、前項の意思決定型とは別の“探し方”が採用される可能性が高い：

- a. “対象物”は明確である。つまり“なくしたもの”である。
- b. “目標”は対象物を見つけることであり、はっきりしている。
- c. “探索範囲”はかなり限定されていることが多い。
- d. “対象物”が他の物品によって隠れていたり、取り紛れていることが多い。

したがって、所要時間や精神的負担などの“探索コスト”をあまり必要としないはずであるし、また、探し手にとってもそうしたコストをかけたくない。

そこで“小さなモノ探し”で前項の2タイプの意思決定型よりも多く採られると思われるのが、成功すればコスト低減につながる「試行錯誤型」と「衝動型」であろう。

「試行錯誤型」は、「簡略な意思決定型」と同様に(3) 選択肢の探索、(4) 選択肢の評価の2段階が省略されて(5) 試行が行われるが、その際、その“探し方”が有望であるか否かの見通しを立てずに、いろいろと試みるなかで有効な方法を見出そうとするやり方である。

また「衝動型」は、選択肢の“探索”や“評価”が一切行われず、最初に思いついた“探し方”をただちに“実行”するもので、その方法を“試行”するという意識はなく、そのため(6) 結果の評価で「成果がえられない」ということになった場合、その方法の変更・

修正は考慮されずに、新たに別の方法を採用することが多いと思われる。

しかし、言うまでもないが、「試行錯誤型」や「衝動型」が結果的に探索コストの低減をもたらすか否かは確かではない。無駄に終わる可能性も高いと思われるからである。

(4) 「基本的方法の採用」位相： 区域的方法と継時的方法

ところで「“探し方”の決め方」についての以上の考察では、“モノ探し”に関する「区域的方法」や「継時的方法」との関連を見ていなかった。しかし、“モノ探し”の出発点には、それらの方法を採用するか否かという決定があるというのが筆者の考えであり、そうすれば、区域的方法では「探索区域の範囲を決めること」が、また継時的方法では「探索の起点を（できれば終点も）決めること」が必要になる。

こうした決定については、消費者・購買者や旅行者の意思決定モデルには該当する位相がない。前述の8段階のなかでは「(2) 一般的決定」の次に位置づけられる位相であるが、本稿でも、これを「(2) 一般的決定の“副次的位相”」として位置づけるか、あるいは「(3) 選択肢の探索」の最初の段階として考えるか、それとも、新たな位相として追加するか、検討する必要があるだろう。いわゆるモデル構成で、その現象の具体的記述をどの程度詳細にするかという問題でもあるが、筆者の関心にもとづけば、位相(2)の次に「基本的方法の採用」として、「区域的方法、継時的方法の採用」を挿入し、それぞれの副次的位相として、区域的方法では「探索範囲を決める」を、継時的方法では「探索の起点を（できれば、終点も）決める」を設定するのが適切でないと思われる。その位相が“モノ探し”のプロセスのなかで無意識的に過ぎていくことがあっても、これを設定することが論理的な説明力を高めるのではないか。

(5) “探し方”の決め方の4タイプ

こうして“モノ探し”の決め方には4タイプがあるというのが、筆者の当面の考えである。いわゆる“意思決定型”の2タイプ（慎重型、簡略型）と試行錯誤型および衝動型である。これらの間には、そのプロセスを構成する段階（位相）に違いがあることを述べたが、それを一括して示すと表Aのようになる。

このように整理できるが、実態はかなり複雑であろう。とくに“試行錯誤型”は「試行＝実行 → 試行（＝実行）結果の評価」というプロセスを繰り返す“探し方”であり、その進行を単線的に描くことは難しい。また“試行”がどれほど意識的に行われるかということもある。モノを探す必要が生じたとき「なんとなく、手近かな所を探し始める」とい

表A “探し方”の決め方の4タイプ

	慎重型	簡略型	試行錯誤型	衝動型
(1) 問題認識	○	○	○	○
(2) 一般的決定	○	○	○	○
(3) 基本的方法の採用	○	○	↓	↓
(4) 選択肢（探し方）の探索	○	↓	↓	↓
(5) 選択肢（探し方）の評価	○	↓	↓	↓
(6) 試行	○	○	□	↓
(7) 試行結果の評価	○	○	□	↓
(8) 実行	○	○	□	○
(9) 終了（達成または中止）	○	○	○	○

（注）ここで ○は「あり」を、□は「試行と実行を区別できない」を、↓は「ない、次へ」を意味する。

う場合も少なくなく、“衝動型”との違いも明瞭でなくなる。

「試行結果の評価」についても、一般的な問題解決行動の“学習”とは異なり、“モノ探し”はいったん成功すれば終了し、反復することがないために、その「結果の評価」がなされる場面も限られることになるう。

今後、“探し方の4タイプ”については、主に試行錯誤型についての検討が必要である。

Ⅲ 本稿のまとめ

日常生活では実に多くの“モノ探し”を行っているが、その行為の“外形”はSTピラミッド型モデルで描写できると考えられる。このモデルは、本稿で取り扱った“小さなモノ探し”とは別に、“大きな（重要度・関与度が高い）モノ探し”にも適用でき、一般性があるのではないかと思われる。しかし、このモデルは“小さなモノ探し”の行為の具体的な表現については触れていないため、その行動を理解するためには明らかに限界がある。

また、その行為を生起させ動かしている要因は、その原因が多様であるのと同じく、多様であり複雑である。特に、探し手の心理的側面、とりわけ意思決定過程のような複雑な心理的機能は、STピラミッド型モデルからは一切伺うことができない。そのため、行為という“外形”についてのより具体的な描写に努めることが必要であるのはもとより、さらに、どこまで“内面”に迫ることができるかも問題になる。それへの取り組みでは、“行為”の観察から仮説検証的にアプローチしていく心理学的方法を的確に適用することが重

要になろう。

参考文献

- 内閣府政府広報室（2016）『“遺失物に関する世論調査”の概要』（インターネット発表による。）
佐々木土師二（2000）『旅行者行動の心理学』関西大学出版部。
佐々木土師二（2011）『観光旅行の心理学』北大路書房。
佐々木土師二（2018）“モノ探し行動”についての小考：「STピラミッド型モデル」の提案。関西大学社会学部紀要，第50巻第1号，75-88。
杉本徹雄（2012）消費者の意思決定過程。杉本徹雄編『新・消費者理解のための心理学』（福村出版，2012年刊）。3章，39-55。

—2018.11.6受稿—